

(公社) 日本鍼灸師会 全国大会 in 愛知大会レポート

シンポジウム①：「病鍼連携について」

講師：鈴木雅雄先生（福島県立医科大学 教授）

鳥海春樹先生（慶應義塾大学 准教授）

中村聡先生（日本鍼灸師会 副会長）

報告者：加藤 竜司（研修委員会）

このシンポジウムでは、3名の先生がそれぞれの病鍼連携についての見解をご講演された。まず福島県立医科大学教授の鈴木雅雄先生から「顔の見える関係で病鍼連携」ということで、先生が病院内で鍼灸をされている中で経験している、鍼灸が現場ではどのように捉えられているのか？どのような位置付け（役割）なのか？ということ、また連携していくには顔が見える関係を構築していくことが重要であるということ、また先生が行った調査研究での鍼灸の通院頻度による患者さんの健康観（QOL）の違いについてお話しされた。

次に慶應義塾大学准教授の鳥海春樹先生から「鍼灸院と病院における情報共有の将来展望—CORIを診る」ということで、まず鍼灸師は何の専門家なのかをしっかりと持つことの重要性、CORI（経絡変動）を取ることで自然治癒力を引き出す（余裕を持たせる）ことであるということ、そしてなぜ鍼灸でも基礎研究が大事なのか？どんな研究が必要なのかについてお話しされた。

3人目に日本鍼灸師会副会長の中村聡先生より「多職種で協働して地域で活躍できる鍼灸師を増やすため」ということで、鍼灸療養費について、多職種連携するために必要な計画書と報告書について、実例をあげてのサービス担当者会議での鍼灸師の活躍について、病鍼連携するためには「鍼灸施術の見える化」と「共通言語」が必要であるとのお話をされた。

その後の3名の先生による合同討議では、フロアからの「医療関係者の方は鍼灸をどのような見方をしているのか？」「鍼灸師の雇用先や就職先について」といった質問に対してのそれぞれの先生からの立場でのご回答があり、活発な議論が交わされた。

鍼灸が医療と連携していくにはという課題に対しては、ある一つの立場の鍼灸師だけではなく、今回のような色々な立場での鍼灸師がお互いの情報や見解を共有して話を進めていかなければならないと再認識させられたシンポジウムであった。